
少年少女

知恵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年少女

【Zコード】

N6862A

【作者名】

知恵

【あらすじ】

ある日、普通の高校生「海斗」に起こった事件。その日から自分に妙な能力が宿る。

第一部

東海斗 16歳 男 趣味・漫画を読むこと 特技・パソコン タイプ：ヘタレ、オタク

別に学校とかつまらないし、行きたくないけど。でも、親が行けつて言う。授業料払ってるのは私たちだからって…

本当は一日中漫画読んで過ごしたいんだけど…まあ、しょうがない。そんな僕が、まさかあんなことにかかるとは思つても見なかつた。

「海斗ー！起きなさいー！」

朝、うるさい母親の声で起こされ、枕元にある眼鏡をかける。基本的起こされるのは好きじやない。大平高校に入つて約一ヶ月。早起きには慣れてきたけど、夜遅くまで読書（漫画）しているから寝不足続きた。洗面所に行つて顔を洗う。まだ頭が寝ている。

「ご飯を食べるために椅子に座ると、お母さんが甲高い声で言つた。「お母さんね、さっき『ミだし』行つたときお隣さんに海斗クンはすごいわねって言われたのよ。お母さんにとっても怠慢の息子だわ。だって、ここら辺じや一番頭のいい学校なんですよ。」

入学してからずっとコレだ。もつ飽きた。ご飯をすばやく食べて一階に戻り、制服を着て家を出た。

「いつてらっしゃいー！」

お母さんの声が響く。恥ずかしいと思わないのかな。

「お兄ちゃん。」

振り向くと、まだ5歳の妹の里美が俺のお弁当を持っていた。俺はしゃがんで里美に目線を合わせてありがとうと言つた。

里美は「コツ」と笑つていつてらっしゃいと言つた。向き直つて駅へ向かつた。いつもより一本早い電車に乗つた。

すると、乗つっている人たちが俺に視線が集まつた。窓を見ると、髪の毛がボサボサの姿で立つてゐる自分が写つた。

俺はすぐ手ぐしで髪を梳いた。それでも直らない寝癖。俺はあきらめて目的の駅を待つた。

電車に乗つて五分。いきなり電車が止まつた。アナウンスが静かに流れる。

「ただいま飛び降り事故があつたため停車しております。」腕時計を見るとちょうど八時くらいだった。

「はあ～」

壁に寄りかかり電車が動くのを待つた。俺はそのまま眠つてしまつた。

ポチヤン…ポチヤン…

んつ？水の音か？何で電車に？

ポチヤン…ポチヤン…

何でこんなに暗いんだよ。

ポチヤン…ポチヤン…

てか、この匂いなんだ？血なまぐせこよみつな…

「コロシテ…」

えつ…？

「コロシテ…！」

目を開けると、外で横になり救命のお兄さんが俺の目を覗いていた。

「大丈夫か？君。意識はあるか？」

何があつたんだ？俺は混乱していて、状況が理解できない。

わかることは、周りにはたくさん人が集まつていて、病院の人たち

がいて…

「おい、君。大丈夫か？」

呼びかけに意識が戻る。俺はゆっくり頷くと、お兄さんは安堵した。

「頭の出血がひどいから、今しつかり手当してもらつから。」

そう言って、お兄さんはどこかへ行つてしまつた。怪我…してるので？

別に特にどこも痛くなく意識もはつきりしている。制服はあまり乱れていないが、止血をしようとハンカチで押された。

眠っている間に何が起こったのかわからない。

戻ってきたお兄さんと、お兄さんが連れてきた年寄りの医者に聞いた。

「あの……何があつたんですか？」

「えつ……覚えてないのかい？」

「いや……寝ていただけで……」

「そうか……」

お兄さんは険しい顔をして話はじめた。

「今さつき、君の乗っていた電車が事故を起こしたんだ。それで今こんな状況になつてているわけだけど……」

お兄さんはさらに険しい顔をした。それを察知した医者が重い口を開いた。

「今のところだが、君以外の人たちはみんな自分を殺してくれって言つんだ。」

「へつ？」

お兄さんが続けて言つ。

「今手当している人たちがみんな言つんだ……『殺してくれ……俺を殺してくれ。』って。

あと、死んでいる人たちの顔は全部笑つているんだ。」

さつきの夢と関係があるのか？俺が考え事をしていると、目の前で治療していた一人の動きが止まつた。

「どうしたんですか？」

「いや……出血が止まって……傷がないんだよ。」

お兄さんが不思議そうに言つた。というか、俺は怪我をしていたのか？痛みを感じないほどいかれたのか？

自分の頭を触ると、確かに出血はなくどこも痛くない。俺は立ち上がり、一人に言つた。

「他の患者さんのところへ言つてあげてください。俺はもう大丈夫な

んで。」

眼鏡をかけ、辺りを見回す。確かに何人も倒れていて、ほとんどの人が『殺してくれ』と唸つている。

ひどい光景だつた。血が飛び交つていて、ばらばらになつたパーティもある。

今でも救出作業をしている。俺は腕時計を見た。十一時。大遅刻だ。

そのときの俺はまだ深く考えていなかつた。自分が大変な事件にかかわつていることを。

第一部

昼過ぎ。

教室のドアを開くと、みんなの視線が集まる。今はホームルームの時間のようだつた。

「東！生きてたのか…」

担任の小谷が言つた。俺はゆっくり頷き自分の席に着く。女子生徒が通る声で言つた。

「先生！どうこうことですか？」

俺は話がわからず周りを見回す。事故で巻き込まれたのか、まだ来ていらない生徒がいた。

「東も来たことだし、もう一度言ひ。ここ最近、自殺やそれを目的とした事故が多発している。

昨日だけで3200件にも及ぶ自殺および事故があつた。これは日本だけでなく世界中にでも起こっていることらしい。」

生徒がどよめく。この世で何が起こっているのだろうか…ふと小谷を見ると、身体が震えていることに気づいた。

「先生？」

前の席の生徒が呼びかける。小谷は狂つたように生徒を見た。

「今、俺にも指令が来た。フフフ…」

小谷はポケットからカッターを取り出し、首に刃を向けた。

「ハハハッ！－これで俺も死ねるんだ！死ねるんだ…！」

「見るな！」

とつさに俺はそう叫んでいた。が、遅かつた。女子生徒の悲鳴。小谷は首から大量の血を噴出し倒れている。

他のクラスからも生徒や先生が騒ぎに駆けつけて来た。ドアを開けた人たちは驚き、息をのんだ。

小谷の顔を見ると、笑っている。幸せそうに。なぜか平常心の俺は、持っていたハンカチを広げて顔に放り投げた。

突然、誰かに見られてる気がしてドアに目をやつた。そこには、同じ学年だと思われる男子生徒が廊下から俺を睨んでいた。

俺はその男子生徒の目を忘れられなかつた。

その日は学校は休みになり、みんなが下校するときだつた。

「東君だよね？」

靴に手をかける俺にむつきの男子生徒が話しかけてきた。

「何？」

「少しお話しない？」

俺たちは公園に寄つた。

「何？話つて。」

「そんな怖い顔しないでよ。」

困つたように笑う顔。俺を睨んだときの人物とは別人のようだつた。

その男子生徒は桜井洋太と名乗つた。

「俺と君は仲間かもしれない。」

いきなりそんなこと言うから「はあ？」としか言えなかつた。

「俺たちは、周りがみんなが死んでいくのに対して、自分も死にたいとは思わなかつただろ？」

「それが当たり前だ。」

「そう。当たり前だ。でも、今のこの世には当たり前は通じない。俺たち以外の人間は、人が死んでいくのに対して頭のどこかで羨ましいと思っているはずなんだ。」

何で？と聞くと、真剣な顔をして俺を見た。

「支配されてるからだ。ここからは俺の勝手の考えだけど。誰かが、俺たち人間の思考を一部支配し、死ぬことに快樂を与えるんだ。そうじやなきや、死ぬときに笑う顔なんておかしいだろ？」

まあ、と相槌を打つ。

「先生たちは、自殺を目的とした事故つて言つてただろ？今日、君は電車事故に巻き込まれただろ？」

その時、運転手は死＝快樂という指令が脳を支配したのだろう。だ

から自殺行為に走ったんだ。」

「じゃあ、俺たち乗客はその運転手一人のせいで怪我をせられたのかよ！？」

「でも、怪我した人たちは苦しいとは思わなかつたはずだ。俺は、怪我した人たちはみんな「死にたい、殺してくれ」と言つていたのを思い出した。俺は青ざめた。

「運転手同様、乗客にも同時に指令が来たんだらう。」

「どうしたらいいんだよ！？」

「俺たちで世界を救うんだ。」

何を言つてるんだ？「これを見て」と言つて桜井は立ち上がり落ちていた枝に手をかざした。俺は少し身を乗り出して見た。桜井が力を込めた瞬間小さな風と共にスパスパと枝が何個にも切れた。俺は驚いて声も出なかつた。

「コレに気づいたのは五日前。夢を見たんだ。暗闇に俺がいて、どこからか水が滴るような音がするんだ。

そして『コロシテ、コロシテ』って聞こえるんだ。その日の朝は母と喧嘩してね。

力を込めていつも使う箸を見ていたら、まるで、カマイタチみたいに切れた。」

話的には信じられないが、今、目の前でその光景を見ると信じられずにはいられなかつた。確かに同じような夢を見た。

「もしかして、その夢見た後怪我とかすぐ治んなかつた？」

「…やっぱり君も見たんだ。」

俺に能力？こんなオタクに？ありえない。

「ありえないよ…僕にはそんな能力…」

「みんながみんな、同じってわけじゃない。たぶん。だからやつてみたらどうだ？」

俺は立つて、適当に力んでみた。

「ふんっ！…！」　「うーーー…」

俺のオナラが当たりに響き渡る。

「やっぱ俺がオタクだから……」

「いや、関係ないって！」

「桜井が俺に触った瞬間だった。

「アツ！何だお前の身体。」

桜井の手から湯気が出た。俺自身は何もないけど…桜井が枝を持つてきて、俺に持たせた。

「もう一度。今度はコレに火がつくイメージをして。」

俺はコレでもかといふくらい想像した。そして…ボンッ！

「…ついた。すげー！」

感心している俺に桜井が言つた。

「俺たちで、この事件の原因を追つてみないか？」

「追うつて…そんなの警察が…」

「その警察が死んだら意味ないだろ？俺たちみたいに能力があるわけじゃないし。

ついでに言つと俺たちみたいな奴等はシラフのままだから、警察よりはまともに動けると思つよ。」

「そんなこと言つても…あてはあるのか？」

「俺の知り合いにいっつがいる。そいつんとこ行つ。出発は明日。わかった？」

いきなりの提案だったが、桜井の勢いに頼ることしかできなかつた。

俺はいったいどうなつてしまつんだろう…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6862a/>

少年少女

2011年1月27日12時09分発行